京都の民主運動史を語る会
会　報

2009年11月15日
第185号

題字　住谷悦治

燎原

燎　原　社
（京都の民主運動史を語る会）
代　表　岩井忠熊
事　務　局
京都市左京区高野東開町1-23
第三住宅33-302　井手幸喜
〒606-8107
tel & fax 075（722）3823

「わだつみ像」をめぐるさまざまな思い出　岩井忠熊　2
創刊当時の『夕刊京都』のこと（2）　一ノ瀬秀文　4
「うたごえ」よ高らかに―京都の「うたごえ運動」の歩みから（6）　志摩　肇　8
連載　「悼」　西山秀尚さん　井上吉郎　7
小野理子さんのこと（下）　川合葉子　10
BOOK『京都シフテリア予防接種禍事件』　小田切明徳　11
会員消息／例会報告／情報スクラップ／編集後記　12

【連載】

この1枚

邂逅した二つのデスマスク

小林多喜二と山本宣治　立命館宇治中・高校文化祭で

二〇〇九年十月十七日、立命館宇治中学校・高等学校の興風祭（文化祭）で小林多喜二・山本宣治（山宣）デスマスク展が開催された。生徒たちの「戦争体験の聞き取り調査」に囲まれるように二つのデスマスクが配置された。格差貧困社会と戦争に反対し倒れた二人を生徒たちに知ってほしかったからだ。新聞に報道されたため、一般の入場者も多数あった。

生前に出会うことはなかったが、二人はお互いの存在を意識していた。多喜二は小説で、山宣は帝国議会で、治安維持法の非人道性を追及したのである。今回の企画は、多喜二デスマスクを所蔵する小樽文学館と、山宣デスマスクを所蔵する花やしきの双方がこの企画を快諾し、デスマスクを貸し出してくれた。邂逅した二つのデスマスクを、中学生・高校生たちが見つめていた。（立命館宇治中学校・高等学校教員　本庄豊）

執筆者紹介

岩井忠熊（いわい・ただくま）　本会代表。立命館大学名誉教授。京都市右京区在住。

一ノ瀬秀文（いちのせ・ひでふみ）　大阪市立大学名誉教授。元「夕刊京都」記者。大阪府交野市在住。

志摩　肇（しま・はじめ）　行政書士、中京民商常任理事、京都ひまわり合唱団団友。京都市中京区在住。

井上吉郎（いのうえ・きちろう）　WEBマガジン「福祉広場」編集長。京都市北区在住。

川合葉子（かわい・ようこ）　原子物理研究者。「原爆展」掘り起こしの会。京都市北区在住。

「わだつみ像」をめぐる さまざまの思い出

岩井忠熊（立命館大学名誉教授・本会代表）

わだつみ像の建立が東京大学に拒否され、末川博総長の決断によって立命館大学（当時の広小路校地）に迎え入れることになったのは一九五三年だった。すでに立命大の教師だった筆者は「学徒出陣」した一人であり、わだつみ像の立命での建立を深い感動で迎えた。同年一一月一一日には小型トラックに積み立てられた「わだつみ像」を先頭に、オープンカーに乗った末川総長がつづき、学生約四〇〇人が京都の中心街でパレードをした。また全学連のよびかけで開かれていた立命館を会場とする全日本学園復興会議と立命館大学建立委員会の共催による、わだつみ像歓迎大会が予定されていた。

荒神橋・市警本部前で大事件

周知のことだが、このわだつみ像歓迎大会に参加するための京大学生のデモ隊が荒神橋で警官隊に阻止され、欄干がくずれて学生たちが河川敷に落ち、五人の重傷者が出るという大事件がおこった。事件の大要はすぐわだつみ像歓迎大会に伝わり、参会者たちが市警本部（当時の警察は国家警察と自治体警察の二本立て）へ集団で抗議にいくことになった。そこで事態は市警本部事件とよばれる事件に発展した。

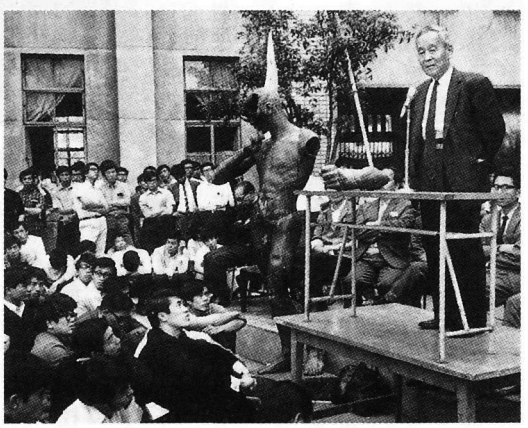
私はその日の午後にたしか前進座の観劇にいき、夕刻に広小路に立ち寄ってはじめて事件の発生をきいて市警前にかけつけ、事態の推移を見まもった。場所は中立売署前にあたる。警察はこの学生デモ隊に対してE弾と称する一種のガス弾を発射し、なお警棒をふるって襲撃した。ここで女子学生をふくむ九人の重傷者が出た。

この事件の経過は今も私の手もとに残る「一一・一一事件究明教授団」のパンフ『荒神橋・市警前で警官は何をしたか』に明らかだ。顧問に末川総長、田畑忍同大学長、恒藤恭大阪市大学長、山内得立京都学芸大学長が名をつらね、市警前事件を目撃した板木郁郎立命大法学部長、竹上藤七郎学芸大学生部長と、後日に市警本部へ真相をただしにおもむいて警務部長に面会した教授団の岡本清一同志社大教授の報告文がのせられている。いずれも事件は警官隊が無警告で学生らに実力行使した事実を物語っていた。私はこうして教授団の下働きをつとめることになり、また格別の事情のない限り毎年一二月八日わだつみ像前の不戦のつどいに参加するようになった。

破壊された像、そして再建へ

つづいてわだつみ像の破壊と再建にかかわる一連の事件との関係について述べざるをえない。「大学紛争」さ中の一九六九年四月、開講にさいし私は三田村泰助文学部長から「全共闘はまず君の小クラス授業を集中的につぶし、それを全学に拡げる方針だという情報がある。何としても君は授業をやりぬいてほしい」といわれた。これはえらいことになったと思ったが、後へは退けない。

それから有心館であった私の小クラス授業は、はじめの一〇～二〇分は平静におこなわれたが、やがて出席者の二、三倍の全共闘学生が乱入し、私に授業をやめるように要求し、抗議する二、三の学生を教室外へほうり出した。私を気づかう文学部長や教職員・学生たちは廊下で見守ってくれている。乱入した学生にかこまれて、私は授業をつづける、やめろとの論争になり、実際は授業にならない。私を坐っている椅子ごと持ち上げて教室の外へ出そうとするので、黒板と教卓の間で椅子にかじりついて抵抗する。「お前はそんなに教授の椅子に未練があるのか」とひやかされて、思わずこちらも吹き出すところだったが、はなはだみっともない姿だった。



破壊された「わだつみ像」前での抗議集会、スピーチは末川博総長（1969年5月23日）

有名な暴力的学生が私に暴力を加えようとしたこともあったが、制止する者があって結局は暴力は加えられなかった。しかしこうした小クラス妨害は連続して七回に及び、何とか全共闘の要求をこばんで開講の面目と形式を維持できたが、正直にいえばウンザリした。わだつみ像破壊事件は私がそのように苦闘している時におこったのである。

河原町の恒心館は封鎖され、そこを拠点とした全共闘のメンバーはヘルメット覆面でゲバ棒をもち、隊伍を組んで街路を行進しては広小路校舎の襲撃をくり返した。すでに何件もの拉致、監禁事件があり、負傷者もすくなくなかった。このままではいずれ警察の強制捜査があることは当然に予想されていた。果たして五月二〇日、府警による恒心館の強制捜査があり、恒心館を追い出された全共闘集団はメインキャンパスに入りこんで暴力の限りをつくし、わだつみ像にロープをかけて引き倒し、その上にゲバ棒で乱打し、無残な姿にした。マスコミは一せいに事件を報道し、「死」とペンキで汚された像の姿をのせた。

だがこの事件は全共闘凋落の契機となり、立命館には全国から全共闘の暴挙を非難する通信が殺到した。そして私の小クラス授業妨害もこれを機としてピタリとやんだのである。だから私個人にとっても忘れ難い記憶となった。以後の全共闘の暴行は集団というよりも、少数のゲリラ的行動になっていった。

本郷新氏の怒りと扇動者たち

私は北山茂夫・奈良本辰也・林屋辰三郎教授が去った日本史学専攻の授業維持と再建に手一杯となり、故後藤靖教授を委員長とするわだつみ像再建実行委員会には加わらなかったと記憶している。しかし親友後藤教授とともに東京梅ヶ丘の本郷新氏宅をたずねて再建への協力をお願いしたのだから、多分後藤氏の頼みを受けたのだろう。その時の本郷氏の怒りは今も忘れえぬほどの烈しいもので、私たちもタジタジとなるほどだった。精魂こめた作品を不条理な暴力で破壊した連中への怒りとともに、立命館が像を破壊から守ることができなかったことへの不満もこめられていた。

私たちはひたすら手ぬかりを詫び、その暴力に屈しない断固とした意思を示すためにも像の再建が必要であることを力説した。本郷氏は結局アトリエにあった像の提供を約束してくれた。また本郷氏宅にほど近いわだつみ会理事長の作家阿部知二氏宅をたずね、再建への協力を依頼し、快諾を得た。その時に阿部さんは「いま頭にきてカッカとしゃべったり書いたりしているインテリゲンチャも、あと何年かするとてれくさくなって、黙りこんでしまうんじゃないですか」と言い放って、カラカラと笑った。いまになって阿部さんはよく見ていたなあと感心することがある。

像が破壊された直後に新聞等で破壊に共鳴する意見を表明した人たちの中に、ついこの間まで立命大の教授だった奈良本辰也・星野芳郎氏らがいたことには、はなはだ釈然としない思いがあった。毎年の卒業式の後で日本史学専攻の卒業生はわだつみ像の前で記念写真を撮影するならわしがあり、いつもその中心に坐っていたのが当の奈良本氏だった。封鎖された中川会館バリケードの前に立って全共闘集団を維新の志士になぞらえる演説をするなど、マスコミ受けをねらう芝居気が見え見えで、やる瀬ない気分にされたものである。同氏のその後は全共闘どころか全く保守化してしまった。阿部氏の観測が完全に証明されたようなものである。

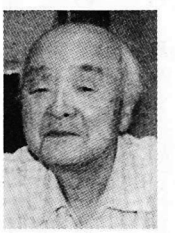
私は長い間、わだつみ像破壊は、府警の強制捜査で拠点の恒心館を追い出された全共闘集団がメインキャンパスになだれ込み、ヤケのヤンパチでやった偶発的な事件だと思いこんでいた。ところが後になって、知り合った当時の戦没学生記念会（通称わだつみ会）理事の中村克郎氏から聞いたところ、理事会の席で小田切秀雄氏（文学評論家　故人）が学生理事に対してわだつみ像破壊をすすめたというのである。そういえば像破壊に太いロープが使われたなど、あらかじめ用意されていた形跡があった。

さらに後に知ったことだが、そもそも戦没学生文集『きけ　わだつみのこえ』の印税の有意義な使用という思いつきで、本郷新氏にわだつみ像の制作を依頼にいったのがほかならぬ小田切氏と中村氏の両人だった。やがて中村氏がわだつみ会を退いた心情の一端が理解されるというものである。また本郷氏が、像破壊を教唆した人物がほかならぬ制作を依頼にきた小田切氏であることを知ったならば、あの怒りにさらに油をそそぐ結果となったであろうと思わざるをえない。本郷氏から像の安全を固く求められて、折柄の広小路から衣笠への校地移転を見こみ、当面は防弾ガラスに守られて図書館に置くことになった。

いまわだつみ像は衣笠の立命館大学国際平和ミュージアムの外部からも見えるエントランスに置かれている。同ミュージアムは修学旅行の生徒たちや観光バスに乗った旅行者たちでにぎわう。いうまでもないが、像が単に立命館大学関係者のかかわりにとどまらず、広く大衆・市民に戦没学徒の悲劇と無念を伝える役割を果たしていくことを念じてやまない。

創刊当時の『夕刊京都』のこと（2）

一ノ瀬秀文（大阪市立大学名誉教授）



一　創刊時のスタッフとその顔ぶれ（上）

剥き出しの政治新聞でなく毎夕発行される一般新聞のかたちで世論をリードする。それに、月二回刊『土曜日』のときのような文化的センスを利かせる。これを、ブランケット（普通新聞1ページ大の紙面、この半分がタブロイド）2ページで編集するというのは並大抵の業ではない。これに、さらにニュースをうまくキャッチして報道する。これらのバランスを巧みにとりながら関心を惹きつける新聞紙面を毎日――夕刊であるから、〆切の午前一一時までに――作り上げる。「今日の社説のテーマは何で、誰が書くか?」、突発的状況変化に対応し、しかも新聞の基本的立場を守り抜かねばならない。しかも杓子定規であってはならない。今週の文化欄の目玉は何? 大学廻り、寺社廻り、婦人、政党、労働、府庁、市役所、警察、府下の農村・地方都市、祇園の行事、家庭料理、健康、美術、文学、読書、映画・演劇、教育、短歌、俳句、川柳などなどに担当の記者を配置して、記事が出来上がっていく。

新聞の性格・特徴は創設者によって決められねばならなかった。それは、『夕刊京都』では、誰よりもまず住谷（社長）、能勢（取締役、編集局長）、和田（監査役の座についた）の三人ということになる。だが、三人だけの独走は許されず、他の分野の取締役（営業・総務・財務＝経理）とも意志疎通が必要である。『夕刊京都』では編集担当の上記トリオと経営の山口繁太郎との間で、創刊後半年余りを経た時期に確執が生じ、やがて繁太郎の退任という事態となる。それ以後、創刊の理念を編集面で持続していくことが困難となり、しだいに普通の夕刊紙と変わらないものに変質していくことになる。これらの成り行きについては、のちに改めて言及することにしよう。

編集中核は住谷・能勢・和田

まず、住谷、能勢、和田の編集中核トリオについて。

住谷と能勢は生年はほぼ同じ（住谷が一八九五年、能勢が一八九四年）、いずれも仙台二高を出て、東京帝大法学部卒。住谷は一九二二年同志社大学法学部助手に就職、二七年に教授、能勢は一九二二年に同志社大学講師に迎えられ、二四年に教授となっている。住谷は、東京帝大在学中に、「東大新人会」の会員となったが、会員の中には、のちに同志社大学法学部教授陣として一緒になった林要（マルクス経済学、ヒルファーディング『金融資本論』の訳者で知られる）や波多野鼎（経済学）、河野密（刑法）などがいた。能勢は新人会に入っていないが、風早八十二と親しく、風早と住谷は同期の新人会員として昵懇であった（田中秀臣『評伝・住谷悦治』三五ページ、六二ページ、『回想の能勢…』一八八ページ）。要するに、住谷と能勢は、いろいろな人脈においても密接であった。そして、この二人に、和田洋一が加わる。和田は、一九〇三年生まれ（京都）、三高を経て、一九三〇年京都帝大文学部独文学科卒業、同年四月、同志社大予科（文学部）に勤務、同僚の真下信一、新村猛、そして知友の中井正一、辻部政太郎、久野収、禰津正志らと、進歩的雑誌『世界文化』を一九三五年に創刊した（能勢も同人となった）が、このことが治安維持法違反だとして、一九三八年に検挙、やがて起訴となり、一九四〇年懲役二年、執行猶予三年の判決（同志社大は退職）。能勢たちも同じ。判決まで二年近く山科刑務所に拘置されていた。四六年に和田は同志社に復職。かつて（一九三三年）そうだと知らずに金子の施しをしたことが共産党員の青年にカンパをしたという理由にされて検挙され、拷問を受け、同志社大学教授退職願を強制的に書かされ、職を失ったことがある住谷が、同じく四六年に復職した（松山高商就職その他の途中の話は略す）。

このようなかたちで、住谷・能勢・和田の「同志社三人組」の密接な関係は独特で際立っており、戦前の治安維持法体制の人権蹂躙的残虐性と反民主主義的本質を身に沁みて共通に体験したという点でも、親密な知人・友人の閾を超えるものがあった。そして、新聞人である前に、

大学教授であるという点が、東京の『民報』とは異なる特徴だと言えるかもしれない。しかし、『民報』のばあいも、松本、長島、栗林の「三人組」は新聞連合社―同盟通信社という通信社系のベテランではあったが新聞の経験者ではなかった。かつて、新聞連合社―同盟通信社で外地記者として活躍した殿木圭一（一九〇九―九四年）が終戦の翌年五月サイゴンから帰国して『民報』の社長松本重治に挨拶に行ったとき、紙面全部を君にまかせるから来てくれないかと誘われたが、それを断った。その理由は、「スタッフが、新聞について素人ばかりだもの」（吉田健二、同上、二四六ページ）とのべている。評論を新聞に寄稿したり、あるいは、『土曜日』のような出版物への執筆協力者を組織して、原稿を集め、印刷・発行・販売していたからといって、一般商業新聞の編集・発行のプロになれるわけではない。和田洋一に至っては、ドイツ文学の教授から『大阪時事新報』（→『大阪新聞』）の「新聞記者」になっていた（一九四〇―四三年）ことさえあった（学芸記者だった）。四六年に同志社大に復職した和田はドイツ語の課目のほかに「新聞学」を担当していた。私のかすかな記憶によると、新聞学科のチーフもしていたように思う。和田は一九五〇年のレッドパージを受けることなく、五三年三月まで常任監査役を務めている。和田のケースが「新聞人」という概念が妥当するかどうかはかなりデリケートで、やはり「大学人」というのが正当だと思われる。

京都新聞組と渡辺政之助のこと

さて、以上の『夕刊京都』編集の事実上の責任者トリオを支える編集局のスタッフの結集と編成が早急に行われる必要があり、基幹的部分は、上記三人の戦前からの文化・社会運動にかかわる人脈によるものがほとんどすべてであった。このルートだけでは充足できない不可欠のスタッフ（とくに記者）は京都新聞から移籍されるかたちとなった。山内市郎（社会部）、徳井義男（大学担当）の二人の記者などがその典型で、年輩のベテランらしい仕事をしながら、出しゃばらず、周囲に溶けこみ、親しまれていた。

なお、上記で、住谷、能勢、和田の三人だけを編集責任グループと見なし、渡辺政之助（取締役）を外したのは誤解を招くかもしれない。上記三人と渡辺との、接点がどのようなものだったかが不明だったからである。夕刊京都発足後、間もなく病気で療養生活に入り、私の入社後しばらくして退社、一九六〇年に死去している。私が入社してほんの僅かの期間、渡辺が編集局長らしい席に座って、大ゲラに朱を入れている姿を見た記憶があるが、それがすぐ能勢に替わったと思う。ある資料で明らかになったが、渡辺（一九〇五―一九六〇）は一九二七年同志社専門学校に入学し、一九三三年（二八歳）に同大学法学部経済学科を卒業して「関西日報」社に入り、新聞記者となっている。同志社に入る前後からプロレタリア文藝運動（短歌・評論）で活動し（北山良平のペンネームで知られた）、また、同志社の左派勢力に助力している。一九四二年頃、同盟通信社に入り、敗戦の年の一〇月、「同志社十月会」を結成するなど、積極的に動いている。彼は、住谷の教え子という関係があり、住谷の人間的・思想的影響も大きかったと思われる。遺稿集として、住谷申一・赤石茂編『渡辺政之助歌集』（一九六一年刊）が出ているとのことである。（以上は、「敗戦直後の京都民主戦線」松尾尊兊、京都大学文学部研究紀要18に拠る）

戦後、同盟通信が解散して、社員と業務が共同通信と時事通信の二社に継承された。共同通信の京都支局に浜田薫記者がいた。「浜ヤン」も渡辺と同じく党員で、同志社出身のベテラン記者だった。京都の産別会議が結成されたとき、彼が初代議長になったが、彼の外見からは想像もできなかったので驚嘆した。浜田と渡辺は戦前からの同志だったと思うが、そのことを聞きそびれたまま、浜田が亡くなってしまった。

輝かしい時期の記者たち

森　龍吉（一九一六―一九八〇）リュウキチでなくリョウキチと読むのが正しいとのことである（鈴木宗憲「若き日の森龍吉―初期思想の形成」『東洋思想』第9号［一九八〇年一二月］二一ページ）。以下に述べるスタッフのうち若干名をのぞいて、一九五〇年七月にGHQのレッドパージを受けている。森のばあいも創刊からレッドパージまでの四年を夕刊京都で「新聞記者」として過ごしている。一九八〇年五月に、六四歳で急逝しており、新聞社時代というのは彼の全人生の一五分の一にすぎなかったが、『夕刊京都』にとっては最も輝かしい時期に、論説委員、文化部長の仕事をしている。

この節で、スタッフひとりひとりの履歴について述べることは不可能に近く、また、細部までの詳細は略さざるを得ない。森は思想的に早熟で彼が龍谷大学在学中の一九三五年（文学部哲学科社会学専攻）に、学友会学芸部を再建し、『宗教と芸術』を復刊し、能勢克男その他『世界文化』の知識人グループ（鈴木、同上）に接近していった。その二年後の一九三七年一二月に、いわゆる「京都人民戦線派事件」で上記知識人たちの一斉検挙となっているが、その僅か一年前の一〇月、龍谷大学学芸部

昭和11年10月、龍谷大学学芸部主催文化講演会記念撮影。前列左から3人目辻部政太郎氏、4人目新村猛氏、5人目武谷三男氏、後列左から5人目和服が森竜吉氏（『京都府百年のあゆみ』より）

主催文化講演会を開き、新村猛、武谷三男、辻部政太郎を招いている。

講師たちと学芸部員が一緒に撮った写真が、京都府広報課発行『京都府百年のあゆみ』（一九六八年刊）に、人民戦線派事件の記事に添えて大きく出ていて、学生一一名のうち一人だけ「後列和服森竜吉氏」と記されている。「あゆみ」が出た六八年には森は龍谷大学経済学部長、日本宗教学会および日本史研究会評議員をしており、多数の著作と論文で注目される存在となっていて、すでに完全な「大学人」であった。重要な点は、学生時代に、一つは、『世界文化』『土曜日』の知識人グループ、いま一つは、龍谷大の進歩的仏教史研究者グループという、二つのサークルに強いコネクションを作り上げていたことである。もう一つが「京都宗教記者会」で、その名簿が、森が「宗教記者」として忘れられない存在だったことの証となっている（『宗教界今昔――京都宗教記者会の歩み』京都宗教記者会発行、一九七九年八月刊）。

北川鉄夫（一九〇七―一九九二）『燎原』第八〇号（一九九一年五月三〇日）に掲載の、北川稿「戦後の芸術活動回想」の冒頭で「私は満州からの引揚者で、京都へ帰ってきたのは、敗戦の翌年の一九四六年の八月十七日であった。……その年の十一月に私は夕刊京都の記者になった」と記されていて、私より一ヵ月後の入社だと知った。北川がいつ、どのような経緯で満州へ行くことになったのかを聞かなかったのは迂闊な話で、知らないのは私だけのようである。彼も新聞記者であった期間は、私と同様短く、新聞社の外での活動のほうが長く、広範囲で、多面的であったことは言うまでもない。

北川鉄夫（本名は西村龍三）は映画評論家で、一九二八年に、岩崎昶（あきら）、佐々元十（げんじゅ）らと日本プロレタリア映画同盟（プロキノ）を結成して、その活躍は知られており、彼の入社は能勢たちから諸手を挙げて迎えられたに違いない。入社してからの北川の仕事は多面的で、映画評にとどまらず、社会評論も書き、特集企画で記事を分担して執筆したり、一人何役をもこなしていた。

沼田稲次郎（一九一五―一九九七）京都帝大の法科大学院を出て、野戦の五年を含め兵役七年で敗戦の年に復員し、その年の一二月に結婚式を挙げているが、その時の媒酌人が能勢克男の父能勢萬夫妻であった。能勢萬は名古屋控訴院長をしており、沼田の父雅が弁護士として昵懇であったことが沼田の『夕刊京都』への就職の契機となった。ついでながら、稲次郎が京大の先輩ということで、彼の媒酌で伊東博（社会部）と辻和子（整理部）との社内結婚の式が行われている。それを祝う寄せ書き帖がじつに見事なアルバム型の装幀で表紙の表題、媒酌人としての祝賀の漢詩が沼田の見事な達筆で記されている。沼田は、在職中も労働法の専門研究を並行的に進めており、記者在職中にすでに著作を出している。そのような関係もあり、『夕刊京都』創刊後間もなく労働組合が結成されたが、企業別組合としてでなく「日本新聞通信（放送）労組［略称、新聞単一］」という全国単一産業別組合の支部として発足し、衆目の一致により沼田が支部委員長に選ばれた。終戦時、陸軍大尉であった沼田は、堂々たる体躯で声も大きく統率力は十分、団体交渉では相手の顔に向けて人指し指を突き出し、理路整然と要求や意見をのべ、相手の欠陥を衝いて、要求を貫徹した。沼田にとっても『夕刊京都』時代は、彼の長い人生の中の一齣にすぎずレ・パ後は東京都立大学の教授となり、さらに総長にも選ばれ、労働法学界の重鎮として生涯を閉じた。彼がある時、日本共産党へのアドバイスのようなことを私にソフトに語りかけてくれたのに、私が貝のようになった記憶があり、いまだにそれが悔恨として残っている。

西村幸雄　政治部記者。沼田と西村、そして、つぎの乙川文夫の三人が、組合の役職に就き、理論をリードした。西村は、絶えず発言してうるさく出しゃばる印象を与えていたが、善人で人情家だったようだ。レ・パ退職後、彼は立命館大学の常務理事として大学の発展に貢献している。

乙川文夫。戦前、松竹で映画製作の仕事をしていたように思われる。どのような人脈で『夕刊京都』に入ったのか、私には不明で、恥じ入るほかない。善人で、西村と対照的で控え目な言動をとっていた。戦前のものだったが、いつも仕立ての良い背広を着ていて、センスの良さを物語っていた。レ・パ後、井上喜代松（後述）や少年社員たちと七月書房という書店で生活を凌ぎ、その後、法律文化社の仕事を手伝い、さらにのち、関東のある地方都市の無所属議員となって何期かの任期を過ごしている。

（以下次号）

悼

西山秀尚（にしやまひでたか）さん

井上吉郎（WEBマガジン「福祉広場」編集長）

2009年9月21日、西山秀尚さんが亡くなられた。85歳だった。西山さんは1924年、伏見の淀で生まれ、戦後の1949年に共産党に入党、京都府青年団体連合会会長、日本青年団協議会副会長、民主青年同盟中央役員などを務め、57年に共産党の専従になっている。府議には79年になり（〝新人〟議員は55歳になろうとしていた）、2003年まで6期24年務めた。日本共産党京都府議団長で同党の府副委員長を務めた人として紹介されることの多い人だが、僕の西山さんはこれとは少し違う。

僕が、西山さんと最初に出会ったのは、1966年のことだった。西山さんが共産党の青年学生部長、僕は京都府学生自治会連合（府学連）の役員だった。その年だったか、その翌年だったか、僕は一人で、新聞社の京都支局に乗り込んだ。新聞が、僕らの府学連を「日共系府学連」「民青系府学連」と書いていることへの抗議だった（ちなみに、もう一つの府学連を「反日共系府学連」「反民青系府学連」と書いていた）。僕が役員をしている府学連こそが正当であり、それ以外の府学連はニセモノ、「府学連」を潜称しているにすぎない。そのような抗議であり、申し入れだった。僕らの組織は府学連、それ以外は「府学連を名乗る学生たち」と書いたらどうかという申し入れだった。もちろん、抗議も申し入れも顧みられることはなかった（毎日新聞の支局長が僕のことを、2回にわたって紹介してくれるということもあったが……）。

新鮮だった〝西山理論〟と府学連の目覚ましい前進

その顛末に耳を傾けていた西山さんは、これ以前もこれ以降も、府学連の役割について、ある確信をもったようだ。当時、京都には京都大学、立命館大学、同志社大学という大きな大学があって、この三大学の自治会などが、資金面でも人材面でも京都段階の供給源になっていた（規模がそれほど大きくない大学もあって、そこも京都段階に貢献していた）。府学連の中心的任務は、大きな大学以外にも自治会組織などをつくることだ。府学連の影響と組織を強めることが、「日共系」などという余計な言葉を取り払う。急がば回れということだったろう。西山さんはそう考え、そうも言明した。

僕らは、自治会がない大学（大半がそうだった）、短期大学、専門学校、看護学校など、高校生以上の学生が在籍している大学・学校に手を広げていった。京都にある「大学」をリストアップして、これらに手を差し伸べた。

ある大学では、この大学の寮の封建的体質を告発した映画の上映を企画した。西山さんと同じ名前の短期大学にも切り込んだ。今では大きな大学になっているが、わずかなつながりをたどって、人を探した大学はいくつもあった。京都には仏教の本山が多いこともあって、宗教系の大学が少なくなかったが、ここでは、西山さんの「大学論」「宗教論」が威力を発揮した。「敵」は宗教ではない。宗教を信ずるか信じないかを争っているわけではなくて、学生の自主的な団結権を認める人はすべて味方という考えだった。「唯物論」をかじった学生に、西山さんの提起は新鮮だった。

「保守的」な学校当局が「処分」を振りかざすという確執もあったが、僕らの方針は、時代の影響もあって、燎原の火の如く広がった。自治会や民青同盟の結成、再結成という成果につながっていった。西山さんの慧眼というべきだろう。

西山さんの活動に、誰もが見逃すようなところに目をつけるという観点があるとすれば、その秘訣の一つが、この時にあるのではなかろうか。また、西山さんの「大学論」「宗教論」は、当時の水準からするなら、先進的だった。京都府学連の再建（1965年12月）からの目覚ましい前進に、時代の影響もあるだろう。しかし、京都に関して言えば、その前進に果たした西山秀尚さんの役割を忘れてはならないだろう。

◇

西山秀尚さんは本会会員。08年12月例会で「占領下、京都の青年団運動を語る」と題して講演、その記録は「燎原」本年3月号、5月号に掲載されています。

「うたごえ」よ高らかに！

――京都の「うたごえ運動」の歩みから――

志摩　肇（京都ひまわり合唱団創立参加者）

その6

本稿（その4）で、石川県内灘浜の米軍射爆場反対闘争支援参加を記述したが、これは既に（その3）でほぼ同内容を投稿し掲載済であった。結果として読者に、二番煎じを提供することとなり深く陳謝したい。

実は以前の投稿は「二回」と信じきっていたが、編集部から「三回投稿済」と伝えられ、私の依頼で送られてその現物を見るにつけ、記憶違いを確認せざるを得なかった。読者の皆さんの御了解をお願いしたい。

だが幸いに重複投稿の内容には、重要な相違点がなく、また描く側面も異なる部分あり安心した。なお過去掲載は「その1」が一九九七年一一月、「その2」は一九九八年三月、「その3」は同年七月だった。

「平和こそ我等のもの」に挑戦

♪「遠く海越えて　呼びかわさん
　世界の友
　我等の願い　我等の心は一つ…」

この曲は作詩＝くぼききょうた・作曲＝木下航二（原爆を許すまじ作曲者）による「平和こそ我等のもの」で、一九五四年第二回日本のうたごえ祭典で、組曲「原爆許すまじ」序曲として中央合唱団が演奏し、これを聞いた私と仲間たちが「ひまわり合唱団でも演奏したい」と、祭典帰着後レッスンを開始した。

しかし小節数七八・演奏時間約三分、音程がソプラノ（女声高音）が五線を越えた上のA（八八〇ヘルツ）・バス（男声低音）は低音部楽譜五線下の♯Fという超難曲で、当時の私たちの演奏水準では歯が立たなかった。

特にソプラノのA音が問題で、当時そのパート有力メンバーだった永谷（現姓山内）美知恵さんが、「頑張ればG音なら出せる」とのことで、キーをト長調からヘ長調に一音下げたが、するとバスの低音が出せないためバスメロデイを書き換えて挑戦した。

加えて重い内容で「その心」を謳うのは容易でなかったが、八月平和月間の討議もあり若い私たちの「熱情」も加え、ナンとか唄えるようになりこれを同志社明徳館でのさる集会に呼ばれ演奏した。

それは多分一九五五年、ひまわり合唱団と京都のうたごえ運動では忘れられない演奏となったのでこれを紹介しておきたい。

ただ「せめて歌詞だけでも紹介を」と思うが、著作権との関係で「それも一部しか出来ぬ」ことを理解されたい。

※以下『　』内は、ひまわり合唱団創立四五周年記念文集の私の寄稿文を転載。

『そのとき呼ばれた主催者や集会は今となっては確かめようがないが、曲が進み昼間部の「原爆をやめよ！」の繰り返しが終わった瞬間、思いもかけず会場から万雷の拍手がきた。しかもその拍手は文字通り止まず、私たちは完全に立往生してしまった。

ようやく拍手が下火となったのでラスト再現部の「遠く海越えて…」と再び唱いだしたが、鳴りやまない拍手にすっかりアガッてしまったのかテナー（男声高音部）が音程を狂わしてしまった。「どうしようか？」と一瞬迷ったが「えい、ままよ」とそのまま唱い終わった。

しかしである、ここでも再び鳴り止まぬ拍手で、しかも「アンコール」の声すら湧き起こっている。「時間・進行は？」と司会者を見たが、司会者自身が一緒に拍手を続けているではないか！

舞台上ではテナーの岡島健治（通称オカケン・当時京大生協…後に関西文理から現在は醍醐地域で自治連合会長）と、小笠原〇〇（当時市職員・悪いが下の名前は忘れた）両君が「インター（ナショナル）・インター」と迫ってくる。肝を決めた私は会場にそれを告げ「起て飢えたる者よ…」と指揮をとった。そしてこれも終わって大きな拍手を得、この日の出演を気を良くして終わったのである。

名演奏家が「鳴り止まぬ拍手」を受けているのは見聞するが、お世辞にも「巧い」とは言えぬ我々の演奏で、このような拍手を受けたのは後にも先にもこの瞬間限り…

問題はこの場合のアンコールで、「インターナショナル」が果たして適

当だったのか？

聴衆は「平和こそ…」に感激してくれたのであり、仮にメンバー中から声があったとはいえ、今一度「平和こそ…」を再演奏すべきではなかったか…　今となっては取り返しのつかぬ反省である…』

※このとき持たれていた集会は、恐らく原水爆問題の集会で、それだけに「平和こそ…」の歌が聴衆の心に大きく響いたものだろう。もし本誌読者中に右の瞬間に居合わせた方があれば、時期・集会名を教えて戴きたいと思う。

「団綱領」で方向を明確に

以下の話も一九五五年、ひまわり合唱団と京都のうたごえ運動に、大きな区切りをつける年の出来ごと。

「ひまわり合唱団は、京都のセンター合唱団として『いつ、いかなるとき』でも、京都府下に平和のうたごえを拡める合唱団である」―多少文章は違うかも判らぬが、これはその年六月の団総会で採択した団綱領である。

この当時あらゆる分野で、運動推進の中心となる団体の位置付け・運動方向を明確にした綱領論議が行われ、うたごえ運動でも同様な方向がとられた。

今にして思えば、少しばかり思い上り、気負ったかも知れない。現在はそのような言葉は「流行せず」「他団体とは平等たるべき」と否定されているが、私はそれは運動と組織のあり方としてはおかしいと思う。

何もエラぶる必要はないが、大衆運動は地域・階層を問わずまた一団体内でも、一人一人のボヤキから始まり、それが集まり共同行動を繰り返す中で要求がまとまり、その実現を目指しブチ当たる方向が明確となり、そして運動を支える組織が半ば自然発生的に作られてくる。

しかし運動と組織前進のためには、先頭に立つ活動家（核）集団が必ずあり、それに共感し運動に随伴する大きな部分が作られ、しかもなおそれにも達しない後進部分が残る。これは我々が自身の体験としても理解出来る運動・組織の「菱形」法則ではないのか？本誌読者の皆さんが関係される分野の状況を教えて欲しいと思う。

うたごえ運動もその一つであり、「何を」「どのような立場で」「誰に向かい歌うか」が、レッスンを通じメンバーの中に確立して初めて人を感動させる演奏が出来る。その上に文化・芸術運動の特性として、意思統一出来たとしても、「声として」表現出来る力を持たねば実践出来無い。

しかしこのことは仲々理解されず、私たちが立つ「平和・民主主義の世の中を共に目指す」仲間からも、「歌ばかり唄っていて何が出来る」「それよりも職場に戻り（例えば）組合活動に参加せよ」等々、「チイチイバッパで世の中は変わらぬ」等、聞くに堪えない悔しい批判に晒されてきた。

しかし人間は、「理屈で判っていても、それが即行動に結び付くものでは無い」「最後に行動に足を踏み出すのは、その一人一人の感情が高まってこそ」は法則である。

文化・芸術の表現力・例えば歌の場合では、「人に聞かせる声を出す苦しい鍛錬の積み重ね、曲の内容を理解する努力」の結果得られるもので、一朝一夕には出来るものではない。

ひまわり合唱団でも、せっかく良い歌い手として力をつけてきた仲間が、「職場の要請」として去って行く残念さを数々経験してきたし、私自身もやがてその一人として二五年の空白を経験するのであるが、それはこの報告でも今しばらく後のこと…

世界民主青年連盟代表団歓迎集会

世界民青連代表歓迎集会で

♪「我等青年平和と幸もとめ
誓いは固く我等闘い抜く…」

これはオシャーニン作詩・ノヴィコフ作曲「全世界民主青年の歌」で、当時の私たちの愛唱歌。

合唱団綱領決定の前の一九五五年一月、世界民主青年連盟の来日と京都訪問時歓迎集会が持たれ、私たちも共にこの歌を唄い合った。

ただ古いことで残念ながら詳細不明、単に記録が残るのみ…

（二〇〇九・一〇寄稿…以下次号）

（しま・はじめ　行政書士・京都ひまわり合唱団創立参加者）

小野理子さんのこと（下）

―ロシア文学者に華麗な変身―

川合葉子（本会世話人、「原爆展」掘り起こしの会）

翌年、春の代議員選挙でも、一郎さんは処分中でありながら高位で当選した。この年一郎さんは全学連書記局に選出され、次いでプラハの国際学連に四年の任期で出向した。中国文学専攻を選んだ理子さんは三回生となり、同学会の副委員長を一期務めたそうである。私自身については、卒業研究に忙しかったこと以外はほとんど覚えていない。卒業してすぐ母親大会準備会の京都事務局に入った。事務局といっても工水戸富士子さんと私の二人だけだった。お母さんたちのパワーに吹き飛ばされそうになりながら、準備、大会参加、報告会などに走り回っているうちに、私は倒れこんでしまった。

夫婦、揃ってプラハ、モスクワへ

そのころ理子さんが就職試験を受けたという話を聞いた。アナウンサーを志望して、最終審査まで行ったのに身上調査で不採用になったということだった。その後の理子さんの華麗なロシア文学者への変身振りについては、『女性研究者は歩む』に納められた理子さんの文章を引用したい（三）。

「恋人（今のつれあい）は、プラハのカレル大学が日本語教師を求めていることを知らせてくれました。国交のない〝共産圏〟へ行くことを承知の上で「宛名のない」立派な推薦状を書いて下さった中文主任の吉川幸次郎先生には感謝しています。」

プラハに行くことが決まった理子さんを囲んで、楽友会館で友人たちが歓送会を行った。

「一九五六年三月卒業、五月末に、不承不承かこころよくか、おそらくその中間あたりの気持で私の渡欧と結婚を許してくれた両親や二、三の親しい人に見送られて、私は一人で羽田からBOAC機（英国航空、まだ日航はなかった）に乗りました。」

「旅券は「ウィーン行き」のものでしたが、途中下機（?）してビルマから中国に入り、シベリアを当時のプロペラ機で横断し、チェコのプラハには六月半ばに着き、結婚しました。九月から大学の極東科で日本語の会話と、後で少し文学も教えました。日本科の主任は女性でした。スタッフも、日本の女を始めて見たという学生たちも親切で、授業はスムーズに進みました。」

「三年足らずで夫の仕事が終わり、彼は京大で中断した勉学をモスクワ大学経済学部で続けることになりました。このときも私は運よく同じモスクワ大学の東洋語学院で日本語教師ができるというので、プラハ生まれの一歳九ヶ月の息子と三人、ソ連に行きました。」

「日本語を教える一方で、留学生のための準備集中コースの夫たち六人のクラスに入ってロシア語を学びました。……三年間日本語教師をした後、文学部の大学院に入学し、「二十世紀ロシア文学・ソビエト文学」の講座に属しました。」

理子さんはこのとき、大学の講義も聴き、その準備でたくさんの作品を読んだそうである。

「一九六四年夏、夫が経済学部を卒業、私も必要単位を取得して退学し、子供も学齢に達していたので、夫は九年、私は八年ぶり、子どもは生まれて初めて、日本に帰りました。」

後から振り返ってみると、小野一郎さんがあの理不尽な処分を受けて、その成り行きで国際学連に勤務するということがなければ、ロシア文学者小野理子さんの誕生はなかったと思う。それで、荒神橋事件を含む学園復興会議のことから書き起こさなければならなかった。「理子さんを偲ぶ集い」には、その頃ともにデモの中にいた人も、橋から転落した人も、一郎さんと一緒に処分された人も集まっておられた。

困難を好機に変えた人生

帰国の翌年、一郎さんは立命館大学経済学部に就職され、理子さんは京大の非常勤講師を皮切りに、京都産業大学の専任講師を経て、神戸大学教養部の専任講師としてロシア語の教育に当たられた。その後、助教授、教授と昇任され、一九九七年定年退職に伴い名誉教授になられた。この間、八二年には神戸大学教職員組合副委員長を務めておられた。専任講師になったときの思い出を、「すんなり来た男性に比べれば、三五歳で講師は遅れていましたけれども、ともかく半人前でなくなった。労働組合員だ、というのは嬉しかったです。」と書いておられる。理子さんらしいなと思ったものだった。やがて筧久美子さんも神戸大学の教員となられた。「理子さんと久美子さんが学生たちを引き連れて、あの神戸大学からの坂を下りてくるところなんか壮観よ。」と誰かから聞いた覚えがある。想像するだけでもこのころの神戸大学を象徴するひとつの風景になっていた。

悼

理子さんのプラハ、モスクワでの子育ての経験と、研究者としてのキャリア・アップの軌跡は京都婦人研究者連絡会を通して後輩の研究者を大変力づけていた。一九八二年には、脇田晴子さんを中心とする日本女性史の研究会に参加し、東京大学出版会から「日本女性史」五巻を出版したが、その第四巻に「ロシアにおける女性解放思想の発達とその日本への影響」を執筆して参加しておられる。

理子さんは幾度となく困難に立ち会いながら、いつもそれを好機に変える力を持っておられたように思う。彼女はそれを「運よく」と表現しているが、ご夫婦で息を合わせてそれを引き寄せる普段からの努力があったのだろう。理子さんは負けず嫌いでもあった。それが残された論文や著書、翻訳、エッセイなどの数にも表れている。

理子さんにとって心残りがあるとすればそれは一郎さんの健康のことだったと思う。実はここ二、三年一郎さんのリュウマチのことでご相談を受けていた。神戸大学病院に膠原病外来があり、同病院に私たちの息子も勤めているので紹介したところ、二ヶ月に一回の外来受診で相談に乗ってもらえることが分かり、主治医もよく相談に乗ってくれて、次第に快方に向かい、外出もできるようになったというお知らせをいただいた。そしてもう少し通い易いところということで、京都府立医大の専門医を紹介されたということだった。

わが家近くの湯葉料理屋で

一段落ついたという思いで、我が家の近くの湯葉料理のお店に小野さん・筧さん両ご夫婦をお招きして、私たち夫婦との会食を計画したところ、どちらからも快諾をいただいて、四月二二日の昼食に六人で集まることができた。取りとめもない近況や思い出話に時間はすぐに過ぎてしまった。またこういう機会を何度も作ればいいからと勝手に考えて、帰り道の案内をし始めたところ、理子さんが「私たちは久しぶりに洛北の辺りを見て帰りたいから」とおっしゃった。この言葉は私たち夫婦にいつまでも残る言葉となってしまった。その後もう理子さんとお目にかかる機会はなかったからである。

振り返ってみれば、理子さんはこの食事会の時には病気を自覚しておられたことになる。そのときに私は少しもその気配に気づかなかった。自分の不明を恥じるのみである。理子さんは、その幅広い交友関係の中で、ごく自然に訪れる機会を大事に受け止めて、理子さん自身の中での区切りをつけていかれたようである。けれども理子さんにとって一番大事だったと思われる、ロシア語とロシア文化の普及につながる日本ユーラシア協会京都府連合会の行事には、いつも一郎さんと一緒に、昨年の十月まで参加されていたと聞いている。

神戸大学で理子さんの同僚として二四年、その後も親交を続けておられた一海知義さんが「理子さんを偲ぶ集い」に寄せられた言葉の中に、

多くの優れた仕事の一つ、
岩波文庫、チェーホフの『桜の園』、
十一年後、
亡くなった日から丁度二ヶ月目の、
三月十七日、
ワイド版岩波文庫が出版された。
それを知らずに、
貴女は逝ってしまった。

と書かれていた。私は、理子さんからの私たちへの贈り物として、この『桜の園』を受け取りたい。

理子さんが愛してやまなかった一郎さんは、理子さんを送った後、二度倒れて入院の日々を送られた。伴侶をなくされた心の痛手がどれほどのものか、計り知れない。けれども、理子さんの思いを受け止めて、一日も早く回復して、誇り高く生き抜いていただきたいと思うばかりである。

文献（三）小野理子「ジグザグの道を歩いてロシア文学者」、『女性研究者は歩む二〇世紀から二一世紀へ』女性研究者の会・京都 pp41-53, 1999年9月

BOOK

田井中克人著『京都ジフテリア予防接種禍事件 69人目の犠牲者』

占領下の薬害事件

本会ではこの春、田井中さんのお話を例会でお聞きしようと計画したが、都合が悪く実現しなかった。その後に、『京都ジフテリア予防接種禍事件』の著者（田井中さん）から「燎原社」宛に本書が寄贈されてきた。私が薬害問題に直接関与したのが、伏見区在住の薬害ＨＩＶ感染者で製薬会社・国を相手に裁判闘争を起こした時、「ＨＩＶとともに生きる会（略称：プラネット）」をともに立ち上げ、病院・教育・自治体等にネットを掛ける取り組みを始め、春のエイズ・キャンドルパレード（市役所から祇園石段下まで）と晩秋のエイズデーの学習会を続けてきた（現在の代表：小田切孝子）。

その後にも「薬害ヤコブ症」が引き起こされたが、それ以前には、森永ヒ素ミルク事件から始め、国の安全管理策が不十分なための犠牲者が後を絶たない。元はと言えばこの「ジフテリア予防接種禍事件」であった。この事を本書は京都、島根の68名の犠牲者からの粘り強い聞き取りを続け事実を明らかにしたのである。当時は、アメリカの占領軍ＧＨＱの下であり、本誌が追及している定員法・レッド・パージによる政治的犠牲者を生み出した構造的な支配システムにその根がある。さてＣ型肝炎問題をみても薬害根絶は今日的であり。田井中さんの勇気とご努力に敬意を表するとともに皆さんに一読をお勧めします。（小田切明徳）。新風舎文庫：８００円。

会員消息

藤井舒之さん（右京区）から。

1960年代の初めに私たちが勤めておりました、京都市南区の小さな工場＝米花製作所でのたたかいを記録した小冊子を作成いたしました。

60年安保の直後のことであり、多くの若者が政治や社会の動きに目を向けるようになっていました。米花製作所でのたたかいも、20歳前後の若者が中心になりました。

今から思えば未熟な面も多々あったわけですが、当時の得がたい経験は、50年近くたった今も私たちの心に深く刻まれています。お時間があるときにでも、目を通していただければ幸いです。（冊子はA5判56頁。残部僅少です。1部300円）米花のたたかいを記録する会（連絡先＝藤井舒之方 nobu3g @ gmail. com）

10月例会 「京都民統会議が果たした役割」

宮田栄次郎さんが講演

10月例会は17日午後、市職員会館かもがわでひらかれました。当初、高山寛氏が「高山市長誕生前後」を語ることになっていましたが、病気が再発、出席不可能となり急遽、高山氏とも親しい宮田栄次郎氏（京都社会労働問題研究所）が「京都民統会議が果たした役割」と題して2時間にわたって講演しました。＝写真

宮田氏は1950年1月、全京都民主戦線統一会議が結成され、2月の京都市長選、4月の知事選、6月の参院選に相次いで勝利した経過を自らの体験を交えリアルに語るとともに、その後民統そのものが「伝説的存在」となり神話化されていることも指摘しました。しかし戦前からの京都の革新的伝統が民統に大きく結集して勝利を生み出したことは間違いなく、学ぶべき教訓は多いと語りました。

例会では宮田氏が編集した「社労研」32号（1975年12月）が資料として配られましたが、座談会「京都民統会議をめぐって―その虚像と実像」の特集。小柳津恒（50年当時、共産党府常任委員）、小川広之介（同、総同盟府連主事）、高山寛（高山市長の子息）が出席、それぞれの立場で振り返った発言は貴重なものと言えます。

情報スクラップ

□■ 日野原重明さんも登場

生誕130年「河上肇記念会会報」

今年は河上肇生誕130年、記念会の会報94号（8月25日）は「河上博士の思い出」を特集。日野原重明・聖路加国際病院理事長は京大医学部時代、河上博士との出会いを述べ、「河上先生あるいは生物学者・山本宣治の教えからキリスト教平和主義、キリスト教的社会主義を身に付けていった」と書いている。林辰彦、河上荘吾、鈴木洵子さんらが登場。ほかに執筆者は13人にも、充実した誌面になっている。

催し案内

真鍋民主町政3周年のつどい 11月15日（日）午後1時45分～4時、大山崎ふるさとセンター（阪急大山崎駅すぐ）。門ゆうすけ・真鍋宗平氏の講演と対談。

秋場忠利広島市長講演会 「核兵器のない世界」を求めて。11月25日（水）午後6時30分、京都産業会館シルクホール（同実行委員会主催）

辻井喬講演会 「日本を変える力を培う――心をつなぐ左翼の言葉」12月4日（金）午後6時30分、ハートピア京都ホール。会費1000円（定員200人）。ブックセンター「本の風」主催。申し込みは電話415・7902。

訂正 前号11面、「小野理子さんのこと（上）」の中見出し「処分に講義して」は「抗議」の誤りです。

来春は創刊30周年 原稿を募集します

「京都の民主運動史を語る会」は1980年2月20日に創立総会が開かれ、「燎原」は同年3月15日に創刊されました。来春は30周年を迎えます。そこで会員のみなさんからの寄稿をお待ちしています。主題・長短を問いませんが、青春時代、京都でかかわった民主運動の体験記、「燎原」についての思い出などを歓迎します。メールでの送稿は yuasa@kamogawa.co.jp 湯浅俊彦まで。

「燎原」編集部

12月例会の案内は別刷りを同封します。